

## 式辞

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

今日この式場にいるのは、卒業生の皆さんと、担任の先生方を始めとする教職員ですが、皆さんを温かく見守り続けてくれた、保護者やご家族、そして在校生の、新たな旅立ちをともに喜び、寄り添う心が、目には見えなくとも、あなたたちを包んでいます。この式場の空気の中に、確かに存在しています。

お茶の水女子大学名誉教授の外山滋比古さんは、「空気の教育」という著作の中でこう述べています。

「校風という空気はそこに学ぶものをたえず包む。空気だから、どんな形をしているか、見ることはできない。しばらくその中にいれば、空気のあることすら忘れてしまう。しかし、この空気が心をはぐくみ、人間を人間らしく育てあげる。空気による教育はふかく根源的である。」

皆さんを育てたのは、学校の空気、校風だけではありません。言うまでもなく、もっとも大切なのは、家族という、皆さん一人一人にとってかけがえのない存在である、家庭の空気、家風です。

家族と離れ、学校を離れても、卒業生の皆さんを育んだ「空気」は、目には見えなくとも、人生を切りひらく力となるはずです。

皆さんの旅立ちにあたり、私自身が小学校の校長先生の講話の中で耳にし、今もずっと心に刻まれている言葉を、今こそ皆さんに贈りたいと思います。

それは、思想家、宗教家の内村鑑三が、明治27年「後世への最大遺物」と題する講演の中で、聴衆に語りかけた言葉です。

「われわれを育ててくれた山や河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝きたい、それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これはいずれも遺すに価値あるものである、しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない、またこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大の遺物は何であるか、それは勇ましい高尚なる生涯である。・・・すなわち、この世の中は、失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中ではなくして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去るということである。」

誰でもこの世に遺しうる、最大の遺物、贈り物とは、一人一人の生涯である、人間として、この世で何をなしたかではなく、どう生きたかである。

卒業生の皆さん、今こそ、あなたたちはどう生きるのかが、問われているのです。そして、どんな時も空気のように皆さんを包んでいる存在があることを、決して忘れないでください。

「幸福な王子」などの作品で知られる作家、オスカー・ワイルドの言葉にこのようなものがあります。

「俺たちはみんなドブの中を這っている。しかし、そこから星を見上げている奴だっているんだ。」「生きるとは、この世でいちばん稀なことだ。たいいてい人は、ただ存在しているだけである。」

上田染谷丘高校で学んだ卒業生の皆さん、あなたたちには、どこにいようと、何をしよう、星を見上げる人になってほしい、そして、あなた自身の人生を、存在するだけでなく、生きていって下さい。

卒業生の皆さんの今後の活躍を願い、卒業式の式辞といたします。

令和二年三月一日

長野県上田染谷丘高等学校長

根橋悦子